

# 『 禅のころ - 曹洞宗 - 』

## お香

平成28年5月第2週放送

仏教で用いるお香は、もともと南アジアや東南アジア原産の香りの木である香木に由来します。これらの暑い地域では、悪臭を除くために体に塗って用いたり、焚いてけむりをくゆらせたりという、日常的・実用的な側面から、邪悪なものを祓い清め、良き香を供えるという、宗教的な側面へと発展していったものと考えられています。

お香は、日本に仏教と共に六世紀半ばに伝来したと伝えられています。

神道において神々に祈りを捧げる時に水が不可欠のように、仏教において仏様やご先祖様に祈りを捧げる時にお香は不可欠なものです。聖なるものと向き合う場合、お参りする者、お参りする場所を清めるという考え方の共通点があり、お香を受け入れやすいものにしたのかもしれませんが。

とりわけ仏教においてお香は、清めるためのものだけにはとどまらず、ご供養の品として差し上げるものとしても発達しました。そのかぐわしい香りが、仏様の崇高な徳のはたらきを象徴するものとされたからです。その様子は、主要な仏教経典においても数多く取り上げられています。

やがてそのお香が禅宗の世界でも取り入れられます。禅宗の儀式において供養の際に用いられるかぐわしい言葉、詩を「香語」・「香偈」などと申します。その代表的なものとして「焼香の偈」があります。

「戒めの香、坐禅の香、解脱の香は、光の雲に乗って全世界にゆきわたる。

その香を全世界の無量の仏様・み教え・み教えを奉ずる者たちに捧げ奉る。

その香を見聞きして、我が身に薫じ、仏様たちの安らかなる境地を明らかにしたいと思います。」という漢詩です。

仏様方の崇高な徳のはたらきがお香に例えられながら、お焼香をする者たちの願いを込めて詠われています。

ところで、この漢詩ではお香を頂くことを「見聞きする」と表現されています。日本語でもお香は嗅ぐものではなく“聞くもの”だとされます。お香を見たり聞いたりするという表現は、仏教経典に由来すると考えられています。そこには鼻だけでなく、私たちの感覚器官全てを用いて仏様の功德を頂くという意味合いが込められているのではないのでしょうか。

## 『 禅のこころ - 曹洞宗 - 』

お香を焚く時、私たちを見守ってくださる仏様がたやご先祖様がたの存在、またその功德を、お香の<sup>かお</sup>香りを見たり聞いたりしながら身近に感じとって参りたいものです。

— 終 —